

平成28年度

第9回新川和江賞

～未来をひらく詩のコンクール～

と き:平成29年2月12日(日)

ところ:結城市民情報センター3階多目的ホール

ごあいさつ

結城市は、ユネスコ無形文化遺産の結城紬をはじめとする伝統的な地場産業と、古くから受けつがれた文化が根付いている歴史と文化のまちです。

この歴史と文化を継承していくのは、未来を担う子供たちです。「新川和江賞 未来をひらく詩のコンクール」は、詩の創作活動を通じて、本市の文芸振興を図るとともに、積極的に未来に向かう創造性豊かな青少年の育成に寄与することを目的として、平成20年度に、結城市民情報センターとゆうき図書館の開館5周年を記念する事業として、詩人で名誉市民であり、ゆうき図書館の名誉館長でもある新川和江先生の名を冠して創設され、今年で第9回を迎えます。

本年度も、市内在住・在学の小・中・高校生を対象に、詩を募集いたしましたところ、2,304点という多くの作品の応募をいただきました。これもひとえに、関係者の皆様の深いご理解と、詩を愛する気持ちの賜物と感謝いたしております。

ご応募いただきました作品は、いずれも力作ぞろいで、受賞されました皆様に心よりお祝いを申し上げますとともに、惜しくも入選を逃された皆様におかれましても、今後ますます詩に関心を持たれ、来年もご応募いただきますことを期待しております。

結びに、皆様が詩の創作活動を通じて、個性豊かな創造力を育み、豊かな心で毎日を過ごされますことを願い、あいさつといたします。

平成29年2月12日

結城市長 前場 文夫

心を、^{あたま}頭脳を、耕しましょう

本年度もたくさんのご応募をいただき、とても嬉しゅうございました。私が皆さんくらいの小・中・高時代には、詩を書く生徒はクラスに一人か二人、それも隠れるようにして、こっそり書いたものでした。太平洋戦争の只中で、学校が兵器づくりの工場となるほどの、暗い時代が続いたのです。

敗戦というかたちで戦争が終り、何を書いてもいい自由な時代がやって来ました。うつむいて^{つら}辛い悲しい思いを綴るのではなく、晴れやかに顔をあげて、宇宙の果てまで夢やあこがれを広げることが、出来る時代が到来したのです。

応募期間が春から夏にかけてのせいかな、この季節を題材にした詩が多いのも、このコンクールの特徴のひとつかも知れません。畑の土がやわらかく耕され、種が撒かれ、野菜や穀物がすくすく育つ季節は、育ち盛りの皆さんの人生と重なる季節で、ほとんどの作品が、前向きのすこやかな詩であることを、すばらしく思います。私は、大都市の小・中・高生の詩も、読ませて頂く機会が多いのですが、それらの詩には無い、三つのすばらしい要素が、結城の皆さんの詩には、有るのです。自然が豊かであることは、今述べましたが、二つめは、あたたかい家族愛に恵まれていること。親子三代、まれには四代もの大家族が、ひとつ屋根の下で暮しているという光景は、都会の生徒さんたちの詩では、見る事が出来ません。結城の皆さんの詩には、お父さんお母さんよりも、おじいちゃんおばあちゃん大好きの詩が多くて、おばあちゃんである私などは、ほくほく嬉しくなってしまう。三つめは、いじめの詩が無い、ということ。クラスメートは、肉親と同じくらいに、大切な存在なのです。

ずっと詩を書き続けてください、と押しつけるつもりは、ありません。ただ、このたびの経験で、心と^{あたま}頭脳をやわらかに耕してみると、今まで気付かなかったことに気付き、見えなかったものが見えてくる、という不思議に、驚かれたことでしょう。社会人になっても、時折はふと立ち止まり、この時のことを、思い出してください。ごく若い日に詩を書いたことは、その時きっと、あなたの役に立つでしょう。

平成29年2月12日

新川 和子

次 第

日時 平成29年2月12日(日)
午後2時
場所 結城市民情報センター
3F多目的ホール

●オープニングセレモニー

新川和江氏作品 「花の名」の群読（優良賞 26名）

●表彰式

- 1 開式のことば
- 2 主催者あいさつ
- 3 来賓あいさつ
- 4 表彰
- 5 第9回受賞作品朗読

新川和江賞（1名）
優秀賞（8名）
優良賞（26名）

- 6 新川和江氏による講評
- 7 閉式のことば

●受賞者氏名

☆新川和江賞（最優秀賞）

河原の石

結城小学校 6年 あさり 浅利 なおみ 直弥

☆優 秀 賞

くろいことり

絹川小学校 2年 しのざき 篠崎 かいり 海里

セミが見た空

江川南小学校 2年 ひろせ 廣瀬 あいと 愛永

かいこさん

城西小学校 3年 やまなか 山中 み の り 美乃里

ずっと見ててね

城南小学校 6年 たかはし 高橋 とわこ 叶和子

音の戦場

結城東中学校 1年 ひらさわ 平澤 ゆい 優衣

大きな木

結城南中学校 1年 しのざき 篠崎 なつみ 捺見

竹よ、

結城中学校 2年 かみなが 神永 こうせい 向星

折りたたみ傘

結城第二高等学校 1年 せきね 関根 ゆうすけ 悠介

☆優良賞

やさしいあめ

結城小学校

1年

うめやま
梅山 ことみ
琴末

あかちゃん

結城小学校

1年

なかた
中田 さら
桜來

えんぴつとけしごむ

結城西小学校

1年

じゅうに
従二 かな
栞菜

みんなともだち

城西小学校

1年

いしかわ
石川 りん
凜

サメの王さま

結城小学校

2年

とやま
外山 れお
玲央

かえる

山川小学校

2年

くろだ
黒田 はると
晴翔

うちのインコ

江川南小学校

2年

いのせ
猪瀬 ゆうた
悠太

つよく

城西小学校

3年

ぬまじり
沼尻 やまと
大和

浄土ヶ浜

城西小学校

3年

ばば
馬場 るりな
瑠璃奈

海

城西小学校

3年

ふじわら
藤原 ことこ
小都子

自然がたくさん

上山川小学校

3年

いわおか
岩岡 さき
早紀

夏の野さいたち

山川小学校

3年

あくい
阿久井 はると
陽翔

ふしぎな音の雨

結城西小学校

4年

しんむら
新村 ゆうせい
佑成

命がつなく

絹川小学校

4年

くほ
久保 ゆい
侑衣

こころって何色？

上山川小学校

4年

おおた
太田 ともひろ
朋宏

チョウの幼虫

結城西小学校

5年

なかやま
中山 ゆうた
優太

くもの子

江川北小学校

5年

さいとう
斉藤 たいき
泰樹

ぶどう

城南小学校

6年

しもこうべ
下河邊 まなみ
愛未

セミの一日

結城西小学校

6年

いのうえ
井上 みずほ
瑞穂

雨の音

結城中学校

1年

いけだ
池田 いぶき
伊吹

すいか

結城中学校

2年

みうら
三浦 せいや
聖矢

ヘルメット

結城中学校

3年

きうら
木浦 まなか
愛可

ふしぎ

結城中学校

3年

さこ
作古 なつみ

夢

結城中学校

3年

なかしま
中嶋 ほえみ
保笑

手

結城東中学校

3年

かわた
川田 まりあ
摩莉亜

私の相棒

結城南中学校

3年

のむら
野村 ともか
朋香

新川和江賞

河原の石

結城小学校 六年 浅利 直弥

河原にはたくさん石がある
山の上から転がって行きつく先は大海原

上流の水は、速い。

まるで新幹線のように

速い流れで運ばれてくるのは、角ばった石
その石と石がぶつかり
ケンカしている

まるで、おじさんが怒っているようだ

中流の水は、おだやか

まるで自転車に乗っている高校生のよう
おだやかな流れで運ばれてくるのは
少し丸くなった角ばった石

その石と石がぶつかり
遊んでいる

まるで、鬼ごっこしている子供のようだ

下流の水は、のんびり。

まるで、散歩しているおばあちゃんのような
のんびりな流れで運ばれてくるのは、丸い石
その石と石がぶつかり
笑っている

フフフフ、フフフフずつと
ほほえんでいるようだ

どんどん どんどん 丸くなる
どんどん どんどん 優しくなる
河原の石は人のよう

短評 新川和江賞「河原の石」

山に降った雨が集って川となり、やがては海にたどり着く。水の旅をふつとは書きたくなるものなのですが、その水に流される石のことを書こうとなさった浅利さんの着眼点に、石にことよせて何か言いたいことをお持ちなのだ、と感じました。

〈まるで〉という言葉がたびたび出てくることに、皆さんも気が付くでしょう。〈ちよつと〉とか〈そつくり〉とか、ほかの物にたとえて表現する時に用いる言葉ですが、浅利さんのこの詩の場合、その比喩表現が、目がさめるように新鮮で、豊かで、それにユーモアがあるのです。急な流れを〈新幹線〉にたとえ、おだやかになった中流の水を、長い脚がゆつくりとペダルを踏む〈自転車に乗った高校生〉の姿を私たちに連想させてくれます。上流でははげしくぶつかり合って、ケンカしているおじさんのようだった石も、平野を流れる川の中では、〈鬼ごっこ〉している子供〈のよう〉に、たのしげになります。ずっと読みすすんで行くと、河原の石に浅利さんは、人間の一生を重ねて書こうとなさったのではないかと、ということが分かってきます。たのしいだけでなく、深い重みも持った作品です。

●受賞作品

優秀賞

セミが見た空

江川南小学校 二年 廣瀬 愛永

ミーン。ミーン。ミン。
ながい、ながい土の中の生活から
まぶしくて、キラキラした空を見たよ

ミーン。ミーン。ミン。
ぼくたちのこえはどつどつ？
一生けんめい大きなこえで歌をうたって
友だちやスキな子をよんでいるよ

ミーン。ミーン。ミン。
人間の子どもたちがつかまえにきた
にげるのは とくいな
おなががすいたら木についてる
あまいジュースをのむんだ
そしてまた、たくさん歌って とびよ

ミーン。ミーン。ミン。
友だちがね ぼくたちのいのちは
とつてもみじかかって話してた

友だちやスキな子とおわかれするのは
かなしいよ

ミーン。ミーン。ミン。
あれ……じょうずに歌えない とべない
そろそろおわかれの時なんだ
さいごの力を出してやる それっ。
ミーン。ミーン。ミン。

パタッ。
土の上はつめたくてはっぱのベッドは
フカフカだ。

ミーン。ミーン。ミン。
今日もあの日見たまぶしくて
キラキラした空が広がっていたよ

短評 優秀賞「セミが見た空」

七年間も土の中にいて、やっと地上に出られたと思ったら、夏の数日を鳴き暮しただけで、死んで行かなければならないセミ。セミが言葉を話せたら、そして文字を書くことが出来たら、きっとこういう自分史を書きのこすことだろう、と思いつながら、読ませていただきました。セミの心をわかってあげるひろせさんの優しさから、この詩が生まれました。題のつけ方もすてきです。規定より行数が多くなりましたが、これ位ならばページに納まりそうですので、選はせて頂きました。

優秀賞

かいじやんと

城西小学校 三年 山中 美乃里

はじめて出会った時は
小さいたまごだった
つぎに会った時
黒いぶくをきて生まれてたね
いっぱいくわの葉たべて
白いようぶくにおきがえして
いっぱいくわの葉食べて
いっぱいうんちして
どんどん大きくなって
どんどんおようぶくおきがえして
カイロマンションのお部屋で
体をまるめて 糸を出し
くるくる自分の体にまきつけて
お部屋にとじこめる
白いきれいなまゆが
白いきれいな糸になり
きれいな糸にそめられて
きれいなき物になっていく

短評 優秀賞「かいじやんと」

〈種紙〉^{たねがみ}といいましたかねえ。私も子供の頃、原稿用紙くらいの大きさの紙にびっしり産みつけられた、黒いサンドペーパーのような蚕の卵を見たことがあります。

卵からかえったへおかいこさんくは、食欲旺盛で、給食の時間、ふりかけられた桑の葉をいっせいに食^はむと、雨の降るような音が蚕室^{かみしつ}には満ちたものです。糸を吐くように成長した蚕は、もう、桑の葉は食へなくなり、へまぶしくと唾^{つば}ばれる用具に移されて、一心に繭作りをします。蚕室を今はへカイロマンションくと呼ぶとのこと、山中さんが書いてくださいましたので、知ることが出来ました。ふるさとの産業の一つでもありますので、養蚕^{かいじやんと}がさかんになるよう、祈っています。

優秀賞

ずっと見てね

城南小学校 六年 高橋 叶和子

父のタイヤ交かん
手伝った私の手は真っ黒
石けんできていねいに洗ったのに
指先に つめの周りに
黒いよごれが残ったままの手
その手をじっと見ていたら
思い出した 祖父の手

こわれた物を何でも元通りにする手
水のもれたじゃ口 動かない田植機
いつも何か仕事をしている手
草かり 庭木のせん定 竹細工
だから いつでも
今日の私の手と同じ 祖父の手

そうそう それから すぐに ふざける手
宿題をしている私の消しゴムかくしたり
筆箱にこっそりおかしを入れておいたり
そんな祖父の手を思い出した

もう 今は 思い出すだけの祖父の手
私は しっかり覚えていてよ
見せることはできなかった
大きくなる私の手

遠くの空から きっと 見ててね
ずっと 見ててね

短評 優秀賞「ずっと見てね」

お父さんも、タイヤ交かんくらいはなさいますが、亡くなったお祖父さまの手は、大変なはたらき者でした。そのひとつひとつを、ちゃんと覚えていて高橋さんも、お祖父さまの血をつけた、はたらき者の手の持ち主でいらっしやるのが、具体的に挙げられているいくつかのお仕事で、わかります。

人間の体のうちでも、仕事の出来る手、仕事の好きな手を、私は一番尊敬しています。

お祖父さまの手は、じっとしていることが嫌いで、おひまな時には、ふざけて人を笑わすことが好きな手でもあったのですね。こっぴどお祖父さまに私もお会いして、その手にさわらせて頂きたかった。

優秀賞

音の戦場

結城東中学校 一年 平澤 優衣

バラバラにつむがれていた音
バラバラにながれていた時間
カンッ ピタッ
音が止まる
バラバラな音が全て止まる

音楽を指揮していた者が 手を挙げる
皆もかくごし かまえる
いつ 音の出発の命令がきてもいいように
いつ 音の戦いの合図がなってもいいように

指揮官の棒がふられる
それを合図に一齐に 我が軍隊が 前進する
他の軍隊の美しい音色に 勝つために
もうここは 見慣れた音楽室ではない
音の美しさを競う 戦場が変わった

フルート軍 流れるメロディーで敵をつて
クラリネット軍 その後につづけ
トランペット軍 正確な情報を我々に
トロンボーン軍 そのほさにつけ
ホルン軍 爆弾の設置を
サククス軍 爆弾の爆破

低音軍 海上から敵をせめ込め
パーカッション軍 副指揮官として 全軍のサポートを
我が軍を勝利に導くために
最高に 美しい 演奏を

短評 「優秀賞」音の戦場

迫力という点では、本年度の第一位と言ってもよいでしょうね。戦場という言葉には、戦争の悲惨さを知っている私も世代には、多かれ少なかれ拒否反応があるのですが、オーケストラの演奏者にとっては、日頃磨きをかけている楽器ひとつが命をかけた兵器で、戦場におもむく兵士のような緊張感が、全身に充ちているものなのでしよう。指揮者が入って来て台に立ち、棒を振り上げれば、ステージ（ここでは音楽室）はまさに「音の戦場」そのものと化します。

それぞれの楽器の調子しらの段階から描き出されているので、いよいよこれから演奏会が始まるという、臨場感があります。

優秀賞

大きな木

結城南中学校 一年 篠崎 捺見

毎日外をながめると

私たちを見ている

大きな木がある

天気が晴れでも曇りでも

たとえ激しい大雨でも

いつでも見えてくれている

大きな木がある

この先何年 何十年も

私たちを見守っている

私の学校の

大きな木

短評 優秀賞「大きな木」

大きな木が一本、堂堂とした姿で、立っています。何という名の木か、枝ぶりはどんなか、葉はどんなかたちをしているのか、何も書かれていません。とにかく、大きな木が一本、立っているのです。それを思い描かせてくださるだけで充分、私たちの心は、安心感で満たされます。

ああ、そういう木が一本、篠崎さんの学校の庭には立っているのだな、ということが、最後のひとことで、分ってきます。

「こちゃこちゃ書かずに、」このような詩の書き方を私もとり入れたい、と思った一篇です。

優秀賞

竹よ、

結城中学校 二年 神永 向星

竹よ、君はそれでいいのか

いつもぼーっと立っていて

ときどき座って休もうじゃないか
いつも動かずそこに居て

たまには歩いて旅をしないか

竹よ、君はそれでいいのか

そのほっそりとした体つきで

もう少し食べて太ろうじゃないか
風が吹けばささやいて

もっと大声出そうじゃないか

竹よ、君はそれでいいのか

いつも仲間と共について

たまには一人で生きてみないか

短評 優秀賞「竹よ、」

竹をうたった詩には、萩原朔太郎に有名な詩がありますが、竹をこのように叱咤し、自覚をうながしている詩はめずらしい。読んでいて、こちらが叱られているような感じがしました。

竹だって、好きで同じところにぼうっと立っているわけではないので、口がきけたらなんと答えるでしょうね。たまには坐ってみると言われたって、籠にでも編まれてみなければ、坐るわけにも行きません。もう少し食べて太ってみようじゃないか、って言われたってねえ、ほっそりして背が高いのが、竹のカッコよさなんですから。よっぱらいが竹にからんでいるように、こいつら面白い詩が書けるというのは、珍しい才能です。

優秀賞

折りたたみ傘

結城第二高等学校 一年 関根 悠介

僕は一人で頑張ると決心するけれど
結局ぶれてしまう

長いようで短い夏の時間に惑わされ
最後に見えるのは
風に煽られる折りたたみ傘のように
頼りない自分

その内僕は傷つかないように
少年のような冒険心にふたをした
いつものように早足で家に向かう雨風の中
傘のせいで
前が見えなかったよ

短評 優秀賞「折りたたみ傘」

〈頼りない自分〉を、〈折りたたみ傘〉にたとえていらっしやる
ところ、ユーモアもあって、なかなかの才気を感じます。ひろげ
るにもたたむにも、手間がかかって、ほんとうに、いらいらして
しまいます。

はじめは比喩として軽い気持ちで思いついたものなのですが、最
後にその仕返しを受けます。雨風の中いつものように早足で下校
しようとしたのに、傘のせいで前が見えない。ふつうのこうもり
傘よりもきゃしゃに出来ているので、風にあおられ、おちよこに
なってしまうこともある。いえいえ、〈ほく〉がじゃなへ、傘が、
です。

やわしつあめ

結城小学校 一年 梅山 琴未

まぶしのそと

きょうは、いつもとちがうかんじ

サラサラ ほわああん

サラサラ ほわああん

きりのシャワーがふっている

いつもは、あかピンクのあさがおが

きょうは、あおむらさきにみえる

まいとこつえてるプチトマトも

つやつやぶるんとおいしそう

おにわのきやくさばなたちも

なんだかいろがこくみえる

みんなきもちよわそうね

なんだか

やさしいあめが

おにわをだっこしているみたい。

あかちゃん

結城小学校 一年 中田 桜來

ママのおなかにあかちゃんがいるんだって
とんとんおなかがおおきくなっ

ママはまいにちくるしそう

ママのおなかにくちをつけて

「おーい!!きこえますかー!!」

つてよんでみる

そうすると「とんとん!!」ってへんじする

あしでけつとばしているのかな?

てではんちしてるのかな

わたしのこえ きこえてるんだね

まだまだママのおなかおおきくなるんだって

あかちゃんはくるしくないのかな?

ママはもうくるしいっていいよ

だからはやくだておいで

はやくかおがみたいから

はやくいっしょにあそびたいから

だからはやくだておいで

ママもばもおねえちゃんもいもうとも

わたしもおねえちゃんもいもうとも

みんなみんなまってるからね

優良児童賞

えんぴつとけしけし

結城西小学校 一年 従一 栞菜

ふたりは なかよし
えんぴつ かきかき
けしけし けしけし
あっ まちがえちゃった
けしけしくん けしてくれる
もちろんいいよ えんぴつくん
ほら きれいになったよ
あっ けしすぎちゃった
だいじょうぶ まだかくよ
らんどせるのなかで
きょうも ふたりは
なかよく おしゃべり

優良児童賞

みんなともだち

城西小学校 一年 石川 凜

とおくからみえる
ちかくにきてみえた しろいのは
おおきな とうだい
かぜが おんがく
うみのおいこのって
とりがうたっているよ
なみがおどっているよ
じゆうっていいね
あおいそらと うみと
しろくもと ちいさいふねが
てをつないでるみたい
やまは てをぶっているよ
さようなら
また くるよ

優良賞

サメの王さま

結城小学校 二年 外山 玲央

おれのキバ かっこいいだろ
大きくて ギザギザしていて ノコギリみたいだろ
どんなえものも このキバで くいちぎる
だっておれは サメの王さま

おれのヒシ かっこいいだろ
大きくて シュツとした形で ジェットきのつばさみた
いだろ

どんなえものも このヒシで おいつめる
だっておれは サメの王さま

大こうぶつは アシカやアザラシ

エイのとげがのどにささると ともてもいたいけど
そこはがまん

だっておれはサメの王さま

ライバルはシャチやイルカ

やつらの体あたりが わまきぼらにきまぬんじ
ともてもいたいけど そこはがまん
だっておれは サメの王さま

優良賞

かえる

山川小学校 二年 黒田 晴翔

ケロケロ
なきながら どこへいへ
あざやかな みどり

雨の後はしばの上では ピョンピョン
たくさんのかえるがジャンプ
たかくとべるのはだれだときょうそう
してるみたい

晴れの日のコンクリートの上 あついでと
大きなジャンプ はいいろのせ中が光っている

田んぼの中のかえる

水の中をスイスイおよぎともても気もち
よそう

どのかえるも 元気に

空へむかって ジャンプ

優太郎

ぼくのぼく

江川南小学校 二年 猪瀬 悠太

うちのインコはぼくの家に来てもうすぐ三年がたし
あやからいろいろおしゃべりしてても「きやか
」ワンワン」とかっている犬のなままねや「ゆきき」と
おしえただじゅうしよをよちゅうまひい
お母さんのくしゃみもまねしてる
かがみ見ながら「ロニョロニョロニョ」とひやひや
首もフリフリ しっぽもフリフリ
おしゃべりのねんじゅうでもしているのかな
「プー」ちやんと「とびざん」のじよをよんごんちや
ぼくの名前もよんでほしいなあ
あしたからねんじゅうじようじようね

優太郎

しよひ

城西小学校 三年 沼尻 大和

「しよひなりなむら」
ぼくは時々お母さんとこいわれます
しよくなるって何だろ
けんかがつよいこと
ジャンケンで負けななこと
クワガタをつかまえるのがうまいこと
花の名前がたくさん言えること
すくいスピードで走ること
うでずもつがつよいこと
ゲームで高とく点を出すこと
てつぽうで空中まえまわりをすること
とびばこの八だんがとべること
体がつよくなること
何かがちがう気がする
つよくなるって目に見えない
だからぼくは、今日も考ええる
しよくなるって何だろ

優良賞

浄土ヶ浜

城西小学校 三年 馬場 瑠璃奈

ふねにのったよ

ふねがうごきだすと

ゆらゆらゆれたよ

海にでたよ

太陽の光りでキラキラ光る

青い海 白い波

うみねこがきたよ

うみねこパンがほしいんだ

パンをなげるとじょうずにキャッチ

ボートにのったよ

ライフジャケットにヘルメット

くらいどうくつに入ったよ

うしろをむいたらエメラルドグリーン

ねがいごとかなうかな 青のどうくつ

優良賞

海

城西小学校 三年 藤原 小都子

ギラギラたいよう キラキラ海

しおだまりの岩のすき間

海そうをふとんにして

エビが二度ねしている

大きな岩のてっぺん

ヤドカリが自分の家のやねに

ペンキをぬっている

白黒の小さい魚が

「たくさん食べて大きくなるぞ。」

と、こけをちよんちよん食べている

だけど、

大きな魚にこけをよごりされちゃった

海のそとで

ハゼは青いひれを開いて

ファッションショーをしている

お客さんは海そうで

ふにゃふにゃ手をふっておうえんしている

海を泳いでいったら

だんだん水がつめたくなってきた

海のそこはいつの間にか遠くなっていた

ここから先の海の中にも

もっといろんな生き物があるらしい

いつか会いに行きたいな

優良賞

自然がたくさん

上山川小学校 三年 岩岡 早紀

森は、自然がいっぱいだ。

小鳥の音がピーピー

自然の音がきこえるよ。

小川の音が、ちよろちよろちよろ

葉っぱの音がさむさむさむさむ

森には、動物いっぱいだ。

しかやいのししたくさんいるよ。

虫もたくさんいるんだよ。

せみの声ミンミン

自然は、山にもあるんだよ。

山は木がたくさんあるよ。

お花や植物たくさん生えているよ。

自然がいっぱい

キラキラしている。

優良賞

夏の野菜たち

山川小学校 三年 阿久井 陽翔

ばあちゃんがざるにいっぱい

野菜を取ってきたよ

つやつやのナス

とげとげのついたキュウリ

まっ赤なトマト

きれいな緑のピーマン

ぼくの大好きな

毛がいっぱいはえたトウモロコシ

ぼくの大きらいな

とっつもとにがいゴーヤ

いろいろなしゅるいの夏の野菜

ばあちゃんの作った新せんな野菜

いっぱい食べて元気に夏をのりきろう

優良賞

ふしぎな音の雨

結城西小学校 四年 新村 佑成

ぼくは、雨の音がすき
だって、一つの楽器から
いろいろな音が出てくるから

車のやねに ぱちん ぱちん
犬の鼻に ぴとん ぴとん
かさにあたると ぽつん ぽつん
家のまどに こつん こつん
紙コップの中に ぽたん ぽたん
サッカーボールにあたって ぽとん ぽとん
お皿にあたって ぽちゃん ぽちゃん
花びらにあたると ちとん ちとん

ぱちん ぴとん ちとん
たくさんの あめ あめ
ぼくに聞かせてね
ふしぎな音 おもしろい音
大すき

優良賞

命がうなぐ

絹川小学校 四年 久保 侑衣

どうして、鳥はセミのことを
ねらうのだろう
かわいそうだから
わたしはおいはらった
セミは地面によこたわっていた
わたしはひろった
セミは前足がとれていた
わたしは考えた
鳥は子どものために
セミの命をいただこうとしていた
さんこくだが
わたしも鳥と同じだ
毎日の食事で
命をいただいている
わたしは感しゃしていただいている
きつと鳥もそうだろう
命は生きることをつなげることだ

優良賞

いろいろな色？

上山川小学校 四年 太田 朋宏

いろいろな形かな？

いろいろな色かな？

形も色もないが、こころは確かに存在する

楽しいときはウキウキと、悲しいときはメソメソと、怒りを感じてヒリヒリと、喜び感じてワアワアと。ぼくの中でその存在をきょうれつに主張する。

いろいろな色があって、悲しむ人のこころがブルーに光っていたらなぐさめてあげられるのに。喜びを感じている人のこころがピンク色なら、一緒に喜んであげられるのに。でもこころは外に出ないから形も色も分からない。

ぼくは人のこころを感じられるやわらかなこころを持った大人になりたい。

優良賞

チョウの幼虫

結城西小学校 五年 中山 優太

チョウの幼虫はその種類によって好んで食べる葉が決まっている

ぼくがかっていた幼虫は山椒の葉を食べていた

たくさん食べるから無くなってしまって家にあったキャベツの葉をあげてみた
だけど見むきもせず食べてくれない

ひと口も食べようとしないので山椒の葉を入れてみたらすごいきおいで食べはじめた

気づくと下には小さくて丸くて黒いフンがたくさん落ちていた

たくさん食べるしフンもたくさんする

たくさん食べていた幼虫は
さなぎになった

チョウになるか心配な日々が続き
そんなある日の朝

パタパタと羽を広げて飛んでいるチョウの姿にぼくは感動した

優良児童

くもの子

江川北小学校 五年 斉藤 泰樹

くもの子がふわふわやってきた
ぼくのテーパールにのって
いそがしそうにあるいる

くもの子がぼくのえんぴつにのってきた
えんぴつを上にあげたら
風にのってとんでいった

くもの子は今どこにいるかな
くもの巣つくっているのかな
まだどこかで会えるかな

優良児童

はなぶん

城南小学校 六年 下河邊 愛未

ぎっしりとむらさき色の実をつけた一ふさ
つぶが落ちないように
そっと手に取る

今にもはじけそうなお実を
口に入れたとたん

「プッチン」とあまずっぱい味が広がった

青くすっぱかった小さな実のころは
「はやく大きくなってむらさき色の
ステキな服を着たい。」と

思っていたのかな

一人前の大きさになって

「わあい、新しい服だ。」と

喜んであまい味になったのかな

まぶしい太陽の光をいっぱいあびた
キラキラかがやくその実を
また口に入れた

あまずっぱい味が広がって
私は思わず笑顔になった

優良賞

セミの音

結城西小学校 六年 井上 瑞穂

朝起きればセミの声

アブラゼミ達の朝のあいさつ

ツツツツツツツツ

アブラゼミ達はいつも元気

早起さんのアブラゼミ

おくれてちがうセミの声

ミンミンゼミ達は大きな声

ミンミンミン

風すぎまで鳴いている

働き者のミンミンゼミ

夕方になると別のセミの声

ヒグラシ達は悲しい声

シシシシシシシ

一日のおわりを知らせるよ

ヒグラシ達の声で心やすらへ

心のやさしのヒグラシ

優良賞

雨の音

結城中学校 一年 池田 伊吹

静かな街に 音が響く

風にふかれて

空が流した涙のように

大きな涙 小さな涙が

いろんな音楽を奏でながら

大地に落ちていく

雨が自然を輝かす

木も笑顔に 花も笑顔に

葉から水が落ち

またきれいな音をたてる

まるで自然のオーケストラのように

雨が大地に鏡をつくる

雨で空が輝いて見える

空も雲もみんな同じように

雨は世界を輝かす

優良賞

すいか

結城中学校 二年 三浦 聖矢

収穫されて店にならぶ僕
買われるのをまつ僕
となりの友達さってゆく
僕の彼女もいなくなった
一人ぼっちになった僕

やっと買われた僕
やっと始まる僕の夏

いつたべられるのかを待つ僕
やっと外に出た
行き先は海

なにをされるのかと思ったら…
すいかわり…
僕はわられた
そして終わった僕の夏

優良賞

ヘルメット

結城中学校 三年 木浦 愛可

僕は出会った
君のパートナーになった
君の命を守るため
春、君と出会った

それから二年がたった
春のすがすがしい空も
夏の大変な暑さも
秋のおいもの匂いも
冬の白銀の雪も
二人の思い出になったね

君といて、嫌なこともあった
夏の日差しが強いなか
一人自転車の中で
君を待ち続けたことか……

それでも君の命を守るため
君の役に立つために
あの春を思い出しながら
君を想う……

僕は出会った
君のパートナーになった
君の命を守るため
自分がたとえボロボロになっても
君の命を守るからね

優良賞

ふしぎ

結城中学校 三年 作古 なつみ

ふと思う

なぜ私はここにいるんだろう

なぜ地球はある いつからあるんだ

宇宙の果ては本当にはないのだろうか

私のまわりはふしぎでいっぱい

あの力エルも 鳥も 私も 木も 太陽も

みんな始まりはなんなんだろう

私はいつもふしぎでしょうがない

もしかしたら 誰かの夢の中を演じている

一人かもしれない

宇宙の先に違う世界があり

誰かにじっと見つめられているのかも

こんな疑問を みんなはあざ笑う

私はおかしいのか きっとそうだ

けれどふしぎで仕方がない

何もかも 一体誰のしわざなんだ

優良賞

夢

結城中学校 三年 中嶋 保笑

ダイバーでも行けないくらいの

深い海の底で

いろんな魚とたわむれたい

宇宙飛行士でも行けないくらいの

宇宙の果てで

たくさん星を眺めたい

世界中を旅する旅人でも知らないくらいの

遠い場所にある広い草原で

寝っ転がって歌を歌いたい

私の夢は広がり続ける

今日も、明日も、明後日も

優良賞

手

結城東中学校 三年 川田 摩莉亜

手は 時に人を救う
眼前にさしだされる 手のひら
その手をとれば 笑顔があふれる
心が救われる

手は 時に人を愛す
頬におかれる 手のひら
包みこむその手に 笑顔があふれる
心があたたかくなる

手は 時に人を傷つける
ふりおろされる 手のひら
じんじんと痛む頬に 涙があふれる

手は 救い 愛し 傷つける
私の手は 救い 愛せる 手にしたい

優良賞

私の相棒

結城南中学校 三年 野村 朋香

あなたはなぜ綺麗な声をしているの
みんなが耳を澄ますくらい
私も綺麗で優しいその声が好きだよ

あなたはなぜいつも輝いているの
みんながこっちを向くくらい
輝いている姿 とても眩しいよ

あなたはなぜいつでも人気なの
みんなから愛されているもんね
かわいくてかっこいい所 好きだよ

綺麗で優しい声 輝いている姿
いい所がたくさんある私の相棒
「フルーツ」が好きです

—新川和江氏について—

- 昭和 4 年（1929） 茨城県結城郡絹川村（現結城市）小森に生まれる。
- 昭和 19 年（1944） 詩人の西条八十氏に師事。
- 昭和 28 年（1953） 第一詩集『睡り椅子』を出版。代表的な詩集に『ローマの秋・その他』、『ひきわり麦抄』、『星のおしごと』等多数。
- 昭和 35 年（1960） 『季節の花詩集』で小学館文学賞受賞。
- 昭和 40 年（1965） 『ローマの秋・その他』で室生犀星詩人賞受賞。
- 昭和 56 年（1981） 日本現代詩人会理事長就任（～1982）。
- 昭和 58 年（1983） 女流詩人による季刊詩誌、「現代詩ラ・メール」を創刊。
日本現代詩人会会長就任（～1984）。
- 昭和 59 年（1984） 結城市民栄誉賞受賞。「結城市民の歌」作詞。
- 昭和 62 年（1987） 『ひきわり麦抄』で現代詩人賞受賞。
- 平成 4 年（1992） 『星のおしごと』で日本童謡賞受賞。
- 平成 6 年（1994） 『潮の庭から』で丸山豊記念現代詩賞受賞。
- 平成 10 年（1998） 児童文化功労賞受賞。『けさの陽に』で詩歌文学館賞受賞。
- 平成 11 年（1999） 『はたはたと頁がめくれ…』をはじめとする全業績に藤村記念
歷程賞受賞。
- 平成 12 年（2000） 勲四等瑞宝章叙勲。『いつもどこかで』で産経児童出版文化賞
JR賞受賞。
- 平成 13 年（2001） 結城市名誉市民となる。
- 平成 16 年（2004） ゆうき図書館名誉館長就任。
- 平成 19 年（2007） 『記憶する水』で現代詩花椿賞受賞。
- 平成 20 年（2008） 『記憶する水』で丸山薫賞受賞。
結城市民情報センター及びゆうき図書館開館 5 周年記念事業
として「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」を創設。
- 平成 22 年（2010） 日本現代詩人会名誉会員。
- 平成 24 年（2012） 石像「野の花ちゃん」を寄贈。結城紬大使就任。

—新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～について—

[目的] 結城市出身の女流詩人新川和江氏による「詩」の創作活動の指導を通じて、結城市の文芸振興を図るとともに、積極的に未来に向かう創造性豊かな青少年の育成に寄与する。

[募集作品] 自由題の未発表詩

[応募資格] 結城市在住、在学の小・中・高校生

[選者] 新川 和江（最終選考）・関 和代・山中 和江・吉田 峰代

[経過]

- 平成 16 年度（2004） 新川和江選「未来をひらく詩のコンクール」開催
（結城市制 50 周年記念及びゆうき図書館開館記念事業）
●募集作品：「私（わたくし）が大人になったら」・「私（わたくし）のふるさと」のいずれかを題材とする
●応募資格：結城市及び隣接市町村在住の小・中・高校生
●最優秀賞：「わたしのふるさと」
児矢野 千穂（三和町立大和田小学校 2 年）
- 平成 20 年度（2008） 第 1 回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
（結城市民情報センター・ゆうき図書館開館 5 周年記念事業）
●新川和江賞：「あまいみをならしてね」 海老澤 匡希（山川小学校 2 年）
- 平成 21 年度（2009） 第 2 回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「夏」 向田 浩哉（結城小学校 5 年）
- 平成 22 年度（2010） 第 3 回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「ランドセル」 野呂瀬 早紀（結城小学校 1 年）
- 平成 23 年度（2011） 第 4 回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「石」 藤野 里菜（結城東中学校 2 年）
- 平成 24 年度（2012） 第 5 回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「日記詩」^{にっきうた} 海老澤 朋代（結城南中学校 1 年）
- 平成 24 年度（2012） 「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」5 周年記念誌発行
- 平成 25 年度（2013） 第 6 回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「変わらない日々」 宮田 和佳奈（結城東中学校 2 年）
- 平成 26 年度（2014） 第 7 回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「やさい」 永田 美穂（山川小学校 2 年）
- 平成 27 年度（2015） 第 8 回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「風のふで」 山田 明依（城南小学校 3 年）
- 平成 28 年度（2016） 第 9 回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：「河原の石」 浅利 直弥（結城小学校 6 年）

—結城市民の歌—

新川 和江 作詞

1. おはよう結城 わたしたちの市(まち)
むらさきの筑波のみねから
太陽ののぼる^{まち}市です
鬼怒川の流れのほとり
千年の昔も今も
娘らがはた織る音の
高らかにひびく市です
名にし負うつむぎのふるさと結城
2. こんにちは結城 わたしたちの市(まち)
旅びとも歴史をたずねて
おとずれる城下町です
いにしへの文化の上に
あたらしい未来をひらく
ひとびとが心寄せ合い
すこやかに暮す市です
かぎりなく伸びゆくふるさと結城
3. こんばんは結城 わたしたちの市(まち)
はつ夏はあの道この道
桐の花におう市です
桑の実にくちびる染めて
幼い日あそんだ友が
祭りには胸はずませて
遠くから帰る市です
なつかしい灯ともすふるさと結城

ことばはいつ 詩となるのであろう
猿に噛みくだかれた木の實が
むろの中で年月を経て酒となるように
夜ふけに草を締めらせし露が
あけがた葉末で玉となるように

新川和子

花の名

新川 和江

もも

ゆきやなぎ

みつばつつじ

花の名をいうときには

この春やつと

ひらがなを覚^{おぼ}えた^{おぼ}ち^{おぼ}い^{おぼ}さ^{おぼ}な妹が

やわらかな鉛筆^{えんぴつ}で

一字書いては

うれしげににっこりするように

わたしは発音^{はつおん}するのです

やはり ひらがなで

えにしだ

こぶし はなみずき

そして さくら……

